

貨幣史研究会（東日本部会）第13回
平成15年9月30日（火）13:30～17:00

<出席者>

座長：鈴木公雄・慶應義塾大学教授
報告：宇佐見 隆之・滋賀大学助教授
 鍛代 敏雄・國學院大學栃木短期大学教授
コメント：桜井 英治・北海道大学助教授
 田中 浩司・函館大学助教授

その他の参加者（五十音順）：

井上 正夫・東アジア経済史研究者
井原今朝男・国立歴史民俗博物館教授
大久保 隆・同志社大学教授
黒田 明伸・東京大学教授
桜井 英治・北海道大学助教授
櫻木 晋一・下関市立大学教授
田中 浩司・函館大学助教授
橋本 雄・九州国立博物館設立準備室研究員

1. 研究報告

以下の報告と報告へのコメントが行われ、その後で討議が行われた。報告・コメントの内容については別添レジュメ参照のこと。

・報告1

「港町の発展過程と貨幣をめぐって」

宇佐見 隆之・滋賀大学助教授・・・別添1

宇佐見報告へのコメント

桜井 英治・北海道大学助教授・・・別添2

・報告2

「戦国期の「境内都市」と物流 一石清水八幡宮寺をめぐって」

鍛代 敏雄・國學院大學栃木短期大学教授・・・別添3

鍛代報告へのコメント

田中 浩司・函館大学助教授・・・別添4

2. 討議の概要（文中敬称略）

（田中）権門寺社・神人達といった宗教領主のネットワークの中で使用されている通貨は、統一化に向かっていったのか、否かといった問題を伺いたい。

（鍛代）現在のところわからない。

（宇佐見）港町成立の時期をいつと考えるかは、レジュメでは井上氏の12世紀末～13世

紀としたが、その時期の史料は非常に少なく、記載は年貢が輸送された事実程度で、輸送量などは出ていない。輸送量などの史料が見られるようになるのは1270年代～80年代であり、港町成立の時期は13世紀末～14世紀が正しいと考えている。ある程度の流通がないと代銭納化はできないので、代銭納化の時期と港町成立時期がつながってくるのではないかと考えている。

若狭の「浦」での代銭納と現物納の動きと、第四段階の港町発展課程との因果関係については（レジュメ p. 3, III 四）、複数の港町が出現しないことには、港町間での取引をすることは難しいだろうと考えてはいるが、現在検討中である。

若狭の場合、公事と年貢がまとめて代銭納化されている例が多いが、南北朝期までの史料が多く、その後は公事か年貢かはっきりしない史料が多い。史料6では、若狭から京都へ送られた物はaに載っているような海産物しか確認できない。これを全部公事とみていいのだろうか。この時期は、年貢と公事とがはっきり分けて認識されているのだろうか、言明できない。

（桜井）この時期の貨幣史の動向は、細かい部分は詰め切れてはいないところもあるが、大きな流れはある程度の展望が見えてきた。一方で、水運史・物流史研究も進展している。これからは双方の研究成果の接点を探る作業が必要であろう。仮説でも構わないので、物流史研究の側から接点を見出せないだろうか。

（宇佐見）史料7の大湊では、換算している基本銭が永楽銭であることは変わらない。伊勢の中心は大湊ではなく、宇治山田であるが、宇治山田全体でどの貨幣が基本になっていたかという研究はなされていない。史料8以降を見ると、金と鏹銭が混ざって使われていることが一般的なようである。同じ伊勢でも、その場所がどちらを向いているか、また山田のような伊勢内部の動きも考えなければいけない。史料14の為替切手の場合は、肥前国が相手なので「しろかね」となっている。また史料11の村山は伊勢の御師であるが、毛利輝元は米で領地代を売ろうとしている。宇治山田は融通無碍で動いているが、大湊は東国海運を見据えているので永楽銭が基準通貨になる。ただ、港での動きは両方が混ざっているということではないかと考えている。厳島であれば「しろかね」が基本になるが、桜井氏のいう「伝統的拘束性」が絡み、銭が出てくるのかもしれない。

（鈴木）無理に統一して理解しなければいけないのではなく、決済ができればよいのではないか。何らかの価値を表示するものであればよく、金や永楽銭など人々が納得するもので決済する。但し、金・永楽銭だけでは流通量が足りないので在り合わせのもので払い、それを受け取る。しかし、取引において資産価値・交換価値として考える際には、金・永楽銭が基準となる。そのような決済の状況がそのまま史料に出てくるのではないか。経済的な行為を地域毎の経済構造体としてどうまとめるかが重要で、永楽銭通貨圏や銀経済圏はそういったものに相当するのであろう。黒田氏のいう「支払協同体」というのは地域の中の経済的な決済関係を統合する一つの構造体だと思う。それが何を契機として、成立するのか。具体的な一つの地域の構造は、そのように捕まえていけばよいのではないか。

（黒田）宇佐見氏の史料7は非常に面白い史料だと思う。同じ日に同じ人に対し「うす銭」・「永楽」と別々に書いてある。うす銭・永楽の交換比率が当事者2人の間で合意されているのであれば、わざわざ別に書くのは合理的ではない。この2人の間で時間を経た場合、交換比率が変わり得ることを想定し、だからこそ同じ日に同じ相手についてであっても別々に書いてある。この2人が属している集団が異なる

とすると、永楽銭・うす銭の関係が違ふことは想定できる。日本にはこういった地方レベルの文書が残っており、もう少しはっきりとしてくるであろう。古銭が何を指しているか不明であるが、資産として留保しておく、あるいは年貢として使う基準銭と普段の売買に使用する通用銭との間の比率を地域毎に勝手に作る。これが支払協同体に入ると考えている。これがどの程度の範囲かを示す史料が出てくれば、より具体的に支払協同体が浮かびあがってくる。史料7では、基準銭としての単位のもの、それを約3.3倍にした「古銭」、8倍・10倍にしている「へいら」「ひた」の3段階になっている。大湊は商業都市であり大小様々な取引が重層的に行われ3段階となっているが、地方であれば2段階かもしれない。

(鈴木) この史料は、銭の名称が変化しつつある中世と近世の端境期の史料である。「へいら銭」・「うす銭」はこの時期独特の言い方で、悪銭の類である。「古銭」はこの時期であれば、「精銭」と同義である。「永楽」は出来が飛びぬけてはいるが、量的に限られる。こうした言い方は地域横断的にある程度どこでも通用する。但し、銭名称の残り方は地域によって異なる。

(櫻木) 史料7の最初に書かれている「三百文」「二貫文」などは名目貨幣・計算単位貨幣であり、実際の貨幣ではない。そのような貨幣が領国単位で存在するのであろう。計算単位としての貨幣が存在し、これとは別に実際の貨幣への換算がなされる。12月21日に「二百文」とある部分は、基準となる名目的な貨幣なので特に書いていないが、その後の3貫400文には「永楽」「中銭」とあり、私はこの「中銭」は「永楽」と同様なものと考えます。

(鈴木) この3貫400文は銭が3400枚で、その内の1400枚が中銭という枚数(実数)ではないか。

(櫻木) 最初の3貫400文は名目上の貨幣と考えられ、永楽はいい銭として認識されている。ただそれに近いしっかりした宣徳通宝や大観通宝などもある。そういったものを「中銭」と呼ぶのではないか。「古銭」は通常の北宋銭タイプの銭で、8倍などの比率の「へいら」は状態の悪い無文系統かと考えた。

(宇佐見) 史料7の中略の後、「貳百六拾」は単位が無い。その後の「数大小」はここだけに出てくるが、大小合わせて260枚という可能性はある。

(鈴木) その可能性はあるだろう。貨幣が錯綜しているので、換算率を経た基準通貨額は出せない。この史料は備忘録で、銭がどれだけあったかを書き、その内訳はわかるものについて書いたのではないか。注釈が何も無い、「二百文」と記されている箇所などは、彼らが日常的に利用しているお金だったのであろう。

(宇佐見) これは老若の出納帳であり、老若のメンバー同志では見れば分かる内容となっている。「二百文」の後の「ただすにて」は「ただす」という銭の種類ではないか。

(井原) この史料の背後には無数の請取状・借用状などがあり、実際に貨幣がどのように動いたかはこの史料だけでは不明である。周辺の史料を調査し、史料の性格を確定しなければならない。

(宇佐見) 残念ながら、関連する史料はこれ以外にはない。

(井原) 関連史料が残っているような史料群で分析していかないと、物流史と貨幣史は接点を見出せないと思う。

(桜井) 先ほどの「ただすにて」の史料解釈は、「ただ、すにて かり申候」ではないか。「す」で借りるというのは無利子で借りることをいう。

「数大小」には「文」がないことを考えると、「文」があるのは銭の枚数ではな

く、この時点で「永楽」と「中銭」が偶々同じ価値であったのではないか。ただ、それが永続的なものかわからないので、区別して記載しているのではないか。時期は下るが毛利一憲氏が奈良で鏹は1種類になるとしているが、究極的には伊勢も東国もその方向に向かうと思う。そのことが段階的に追えると面白いが、この史料もそこに向かう一瞬のクロスセクションとして重要である。この史料から引き出せるものは、できるだけ多く引き出した方がいい。

- (田中) これは清書されたのではない生の史料で、近世の大福帳のようなものに近いのではないか。
- (鈴木) そのような史料の性格を理解した上で利用していけば色々と引き出せる。現在はどこにあるのか。
- (宇佐見) もとは伊勢市役所の支所にあったが、現在は『大湊振興会所蔵文書』という名称になっており、共有文書の形で保管されているようである。
- (黒田) 銭そのものが移動したという史料は出て来ないのか。100貫文で400kgであり、銭は輸送コストが非常に高いと思うが。送り状などはないか。
- (橋本) 東日本に永楽銭が集まるという話について、和船によって運ばれたと想定した場合、海運史の研究者に和船にどれくらいバラストが必要かを聞いてみる必要がある。*1
- (鈴木) 屏風絵などを見ると実際に銭を送っていると思う。私は、陸路で搬送していたと考える。
- (桜井) 貢納等で京都に銭が戻るのではなく、銭が地方に留まった仕組を解明する必要があるのではないか。
- (井原) 越後の院政期の史料では船の史料は見つけられない。人夫の費用より駄賃が膨大にかかっている。
- (橋本) 「駄賃」といっても本当に陸路かどうかは分からない。*2
- (鈴木) 分からないが、キャラバンのような形で5貫くらいずつ運んだのではないか。
- (黒田) 地域毎の銭の需給調整はかなり難しいと思う。
- (鈴木) 備蓄銭が全国で相当量出土するのは、ネットワークの拠点に銭のストックがあり、ある程度の銭はそこで調達しているのではないか。15世紀くらいまでは、10万枚、20万枚という規模で出土し、経済拠点に近い所からの出土が多い。それが、16世紀半ばともなると崩壊し、出土の規模が小さくなる。

*補足 …研究会終了後、橋本氏より以下の情報が寄せられた

1. 瀬戸内海の沈没船から、銭は出ていないとのこと。国内船（和船）は、石などをバラストにすることが多く、そこが国際貿易船との違い。
2. 遣明船貿易関係で、船荷も「駄」と数えるのは、『鹿苑日録』明応8年8月6日条。ただ、これも船に乗せるまで馬に乗せてくるのが普通だから、単位を「駄」としたのかもしれない。いずれにせよ、船の経営に関わる単位としても、「駄」が「援用」されていたことだけは確かなようである。

以上